

ジャックリー・ウィルソンの作品に見る〈食〉の表象： その現代性について

Representation of Food in Jacqueline Wilson's Teenage Novels

児童学科
Dept. of Child Studies

川端 有子
Ariko Kawabata

抄 録 本研究は、イギリスの現代児童文学作家で、ヤングアダルトの読者に絶大な人気を誇るジャックリー・ウィルソンの作品の中から、数作品を選び、そのなかの〈食〉の表象を探ることで、現代の少女たちを取り巻く諸問題を、この作家がどのように扱っているかを考察したものである。ウィルソンは、シングル・ファミリー、ヤンママ、DV、離婚、再婚家庭などを扱い、現代の家族関係の困難な状況を描くことが多いが、それらの問題は、家族メンバーの食事や食卓風景に象徴的に表れている。ジャンクフード、過食症、拒食症、孤食といった問題をはらんだ食表象の分析を通じて、主人公たちがどのようにそういった境遇を受け入れ、また克服していくかを辿ることで、ウィルソンの作品の特徴を明らかにするのが目的である。

キーワード：ジャックリー・ウィルソン、現代イギリス児童文学、ヤングアダルト、食、家族問題

Abstract This dissertation analyzes representation of food in Jacqueline Wilson's books, which are very popular among British teenage girls. Her works treat typical domestic problems: single parents, young mothers, domestic violence, divorces, re-marriages, step families and so on. In her works, these problems are typically represented through food and eating scenes. Especially the protagonists often have eating disorders, eat only junk food, or take their meals alone without other family members. By exploring these phenomena, I show how her protagonists manage to deal their family problems, and show the particular features of Jacqueline Wilson's attitude toward these contemporary problems. I discussed mainly on four of her books, with some references to a few others, out of her considerable output, because they provide typical examples of food and eating behavior—which embody the family difficulties.

Keywords : Jacqueline Wilson, contemporary British children's literature, food, family problems, teenage girls

1. はじめに

ジャックリー・ウィルソン (Jacqueline Wilson, 1945-) は、現代イギリスの人気児童文学作家のひとりである。ロンドンに程近いキングストン・アポン・テムズに在住し、今までに50冊近いティーンズ向けの作品を発表しており、それらはスマーティーズ賞、ガーディアン賞などを次々に受賞、とりわけティーンズの少女たちに圧倒的な支援を受けている。その著作活動を称して「子どもの桂冠詩人 (Children's Lauriat)」の称号を授けられ、2010年に

は「十代の女王 (Queen of the Teens)」にノミネートされていることから、その絶大な人気は推し量れる。

彼女の作品はイギリス国内だけではなく、2005年には30カ国で翻訳が出されており、全世界で総売り上げ2,000万部に達したという。日本でもコンスタントに23冊が翻訳されており、公立図書館にかならず置かれていることから、日本でも相当数の読者を獲得していると考えられる。

ウィルソンは、子どもの頃から読むこと、書くことが非常に好きだったといい、その作品にはイー

ニッド・ブライトン (Enid Brighton), E. ネズビット (E. Nesbit), ノエル・ストレットフィールド (Noel Streatfield) らの影響が色濃く表れている。また、作中にも『ジェイン・エア』、『アンネの日記』を愛読する主人公が登場し、そういった先行作品からの間テクスト性にも興味深いものがある。だが本人は、最も影響を受けた作品は『ロリータ』であると述べており、これが彼女の作風にどう反映しているのかは謎である*¹。

こうして絶対的に子ども読者からの支持がある作家だが、シリーズ続行中からすでに単行本のレベルで批評や研究書があった『ハリー・ポッター』とは違い、彼女の作品については、研究論文がほとんどない。現代の児童文学の「家族」をおもに扱う作家を何人か取り上げている論集 *Family Fictions* がウィルソンについて一章を割いているくらいである*²。これはウィルソンが、ファンタジーという様々な解釈を許す分野ではなく、地に足のついたリアリズムを得意とするという理由にもよるだろう。だが、彼女の作品は、基本的にエンターテインメント性が強く、現代の風俗に密接に絡む読み物であり、かつてのブライトンや<ナンシー・ドルー>シリーズのような子ども向け大衆シリーズ作品同様、子ども読者の圧倒的な支持は得るものの、それについては50年後くらいにようやく社会現象として研究されるようになる性質のものであるからかもしれない。

ウィルソンの作品の特徴としては、まず、ほぼ全作品が少女を主人公としており、その主人公を一人称の語り手として物語を展開するという点があげられる。思春期の少女の悩みを描くという点で、アメリカのヤングアダルト向けの作家、たとえばメグ・キャボット (Meg Cabot) などと共通するところは多いが、アメリカのヤングアダルト小説よりは年下のローティーンを対象にする作品が多いため、ウィルソンのティーンズ・ノベルはキャボットの作品のように恋愛を主とするものではなく、テーマのほとんどは、主人公と家族との葛藤ということになる。

事実、ウィルソンの作品は、いろんな意味で大なり小なり問題を抱えた家族を描き、その中で主人公は、さまざまな葛藤に悩むのだが、作風は決して暗くはならないし、ストーリー展開はスピーディで、読者を飽きさせない。また、風景描写や心理描写はほぼないに等しいが、ファッションと食べ物の記述は非常に多い。

どちらもティーンズの女の子の関心事であるという点では共通するのだが、とりわけ食というモチーフは重要だ。なぜなら食と食卓は家族のメタファーであり、家族関係の表象に他ならないからである*³。とりわけ、ウィルソンは現代ならではの家族関係の困難さ—シングル・ファミリー、ヤンママ、DV、離婚、再婚家庭、児童施設の子どもなどを描くことが多い。それならば、作品に書き込まれた食、食卓、食行動などの<食べ物>をめぐる描写は、どのように問題を浮かび上がらせているのだろうか。そしてそれらの問題が解決—とまではいかないまでも納得のゆく妥協へ導かれていくとき、その過程をどのように表象しているのだろうか。

また、現代の少女たちは<食>のはらむ様々な問題に取り囲まれている。ジャンクフード、過食症、拒食症、孤食などは、やはりウィルソンの作品に大きな位置を占める。これらはまた、上記に述べたような家族の問題と密接に絡み合っている。子どもたちに圧倒的な支持を得る作家として、ウィルソンはそうした<食>の現代性にどういう態度を示しているのだろうか。これらの問いに答えるために、この論の中では、順に「食卓のある孤独」、「食卓のない家」、「摂食障害」そして最後に「理想の食卓の明暗」について論じていきたい。

2. 食卓のある孤独

『シークレッツ』(*Secrets*, 2002) は、まったく階層の違う二つの家庭の少女インディアとトレジャーの視点から交互に描かれる物語である。インディアの家は裕福で、スマートな母は子ども服のデザイナー、父は会社勤めで忙しい。贅沢な家に暮らしながらインディアはオペア*⁴に任せられ、母には無視され、父にも前のようにはかまってもらえない。その寂しさを埋めるように、インディアは食べることにふけり、その結果、太り気味で母親にダイエットを薦められるが、ジャンクフードに手を出すのをやめられない。そのうちに父は会社のお金の使い込みで告発されたうえに、オペアのワンダに手を出したことがばれ、両親は結局、別居することになってしまう。この家族が共に席に着く食卓は、彼らがもうすでに心が通い合わず、崩壊を迎えていることを物語っている。

Dad got so drunk he didn't even make it through

supper. He ate a few bites of steak, gagged suddenly and lurched from the room. Mum stared at the salad on her plate, cutting her cucumber and carrot into tiny pieces while Dad threw up noisily in the downstairs loo. Wanda groaned sympathetically, her hand clamped over her mouth. After a long time we heard dad staggering up the stairs.

Wanda scraped her chair back and got up. Mum glared at her.

‘He’s ill. Perhaps I’d better help—’

‘He’ll manage,’ said Mum.

So Wanda sat down again. She was greasy-white herself. Her eyes suddenly popped ‘I’m sorry, I...’ She bolted from the room.

‘Dear God,’ Mum said, putting her knife and fork down. ‘Has she been drinking too?’ She sighed heavily.

I felt sorry for her. It was going to be so humiliating when she found out about Wanda’s baby. I felt so sad for all of them. It made me feel empty inside. I stuffed a large slice of bread in my mouth to try to ease things.¹⁾

すでに酔っ払っている父は、ステーキをもどしてしまう。つねにダイエット中の母は、いつでもサラダしか食べないのだが、心はここにあらずという様子で食べ物口に入っていない。オペアのワンダは、実は父の子どもを妊娠しているため、吐き気で食卓についていられなくなっている。そして「わたし」つまりインディアは、大人たちのこの状況に対して、どうしようもなく無力である。彼女にできるのは、せいぜいパンを胃に詰め込むことでこのいたたまれない状況に耐えようとするこくらしいのである。

このインディアが屋根裏に匿うのは、義理の父のドメスティック・バイオレンスから逃げ出し、祖母と暮らす少女トレジャーである。公営住宅^{*5}に住むトレジャーに、インディアは偶然出会ったのだが、まったく違う境遇であるにもかかわらず、親の行動から被害を受けている子どもという共通点が、彼女らを結びつけたのであった。インディアの「アンネの日記」作戦のおかげで^{*6}、最終的にトレジャーは、親権を振りかざす父から離れて、祖母と暮らすことができるようになる。その祖母が作ってくれる食事は見ものである。

Treasure’s Granma looks incredible, long blond curly hair and bright blue eyes and shiny pink lipstick. She was wearing a tight pink top, black trousers and pink high heels when I first met her. She cooked us tea: egg and bacon and baked beans and tomato and fried bread for Treasure and me, two eggs and four rashers and extra baked beans and tomato and practically whole fried loaf for Willie, just baked beans and tomato for Patsy because she has to watch her figure for her future showbiz career, just toast for Loretta because she was going out with her girlfriends and she’d have a pizza later, and runny egg and soldiers for little baby Britney.²⁾

卵とベーコンとベークドビーンズというのは、伝統的なイングリッシュ・ブレックファストの定番メニューである。簡素な食事ではあるが、祖母はそれぞれの家族のメンバーのニーズに合わせて調整しており、この食事を共に取ることによって、祖母の家に暮らす複雑な構成の家族メンバーは絆を培っているのである。

家族がそれぞれにばらばらに食事をする風景は、『クリスマス・ブレイク』(X’mas Break, 2005)にも見られる。エムの家では、家族はてんでに好き勝手な食事をする。子どもたちは学校から帰るとおやつ、母は軽いスナックを食べて父を待つが、浮気性の父は帰らない日も多い。母子が同居させてもらっているのは祖母の家だが、祖母は祖母で勝手に冷凍のダイエット・メニューをひとりで食べる。こんな家族でも一年に一度だけ、みながそろって一緒に食べるのがクリスマス・ディナーである。ところがこの年、ディナーの最中に新しい恋人と携帯で話す父を目撃したエムは、翌日、父が出奔したという事実を受け止められずに過食に走る。この物語は、父が果たして帰ってくるかどうかは定かでないまま、約束を信じてイヴを迎える子どもたち、というところで幕を閉じる。いったんはジャンクフードのやけ食いをやめたエムが、不安のあまりチョコを口に入れ続ける場面が痛々しい。

『ミッドナイト』(Midnight, 2003)では、反抗期の兄ウィリーは日曜日以外、家族と食卓を共にしない。しかも、日曜にも決して口を利かずに食卓に着く。そのことで、彼は父親が支配する食卓、すなわち家族そのものに反旗を翻しているわけだ。心のつ

ながら家族の肖像は、ゆがんだ食卓風景に反映されている。インディアもエムも、愛情に満たされない心をジャンクフードで埋めるしかない、孤独な食卓の子どもなのである。

ウィルソンの作品の主人公は、今まで述べてきた三冊の作品のように、満たされない心をやけ食いで紛らわせるため、ちょっと太めでそれを気に病む少女であるか、偏食のため、やせっぽちのちびであるかのどちらかであることが多い。どちらの場合も、その身体性は彼女の家族のあり方と深いかかわりを持っている。次に取り上げるのは、養うことを知らない親のもとで育つ子どもたちの食事情である。

3. 食卓のない家

十代の妊娠というのは、現代イギリスでもっとも深刻な社会問題のひとつである。多くは高校中退のまま、シングルマザーとなったヤンママたちは、高等教育を受けていないために専門職に就けず、ウェイトレスやバーメイドなどをして不安定な生活を続け、結局は生活を支えていくことができずに生活保護を受けることになる、というのが厳しい現実である。児童文学で十代の妊娠を扱って話題になったのは、バーリー・ドハーティ (Berlie Doherty) の『ディア・ノーバディ』(Dear Nobody, 1991)であった。この作品は、18歳の主人公ヘレンは考え抜いた挙句、母となることを選び、生まれた娘のおかげで祖母、母との絆を修復していくという感動的な内容で、カーネギー賞を受賞している。だが、この物語の中で、娘に堕胎をすすめる母が、シングルマザーの人生のマイナス面を警告し、大学受験を延期して子どもを生むことを決意した娘をとめようとする場面がある。それこそがウィルソンの描くシングルマザーたちの姿である。

とっかえひっかえ新しい男と同棲し、生まれた子どもを養うことなど考えもせず、自らの欲求の赴くままに突っ走る若い母。ウィルソンの作品によく表れるこの典型は、たとえば『タトゥー・ママ』(The Illustrated Mum, 1999) のマリーゴールドである。彼女はアル中で躁うつ病、ドルーとスターという二人の娘にまともな食事を与える力もなければその気もない。母が朝になっても帰ってこない日には、二人の娘はチョコバーを食べて学校に行く。そうかと思うと生活保護費が入った日には、全てのお金を費やしてバレルいっばいのアイスクリームを買

い込み、三人はそれを洗面器にいれて食べるのだ。母親は料理はちっともしないくせに気が向くとケーキやクッキーばかり山のように作り続ける。このシングルマザーの一家のまともな食事といたら、せいぜいがマクドナルドかピザ、フィッシュ&チップスといったファーストフードである。スターはそんな母親に愛想をつかして出て行ってしまいが、主人公ドルーはどうしても母を見捨てることができない。現実の子どもはおそらくスターであり、同時にドルーなのだ。「まとも」でない母親がいやで、「まとも」な家族に憧れつつ、破天荒な母親の気まぐれを愛し、愛されることを望む。ただ、現実の子どもは、出て行くスターと、とどまるドルーのどちらかを選ぶことを許されてはいないはずだ。

『ローラ・ローズ』(Lola Rose, 2003) は、当たりくじを引いて手にした大金で、夫のドメスティック・バイオレンスから逃げ出した母子の、行き当たりばったりの生活を描いている。母親は、食事代わりにローラ・ローズと弟のケニーにチョコバー、アイスキャンディー、ポテトチップスを与えるが、自分は太るのを恐れてワインとたばこしか口にしない。乳がんがみつかった入院したあと、子どもたちに用意していったのは、冷蔵庫の中のピザと大きなケーキだけである。子どもたちは、それがなくなると、カビの生えたパンとかんづめでしのぎ、アパート上階に住むゲイのカップルに食べ物を分けてもらう始末だ。ついには、母の姉にあたるバーバラおばさんが、手作りの料理と果物を抱えて現れて、彼らの窮地を救ってくれる。このおばさんはヤンママの妹とはまったく異なり、巨体で食べるのも料理も大好きで、父にも母にも見捨てられた子どもたちは、一瞬のうちに心も身体も満たされるのである。結果的に、退院した母はこの姉と仲直りして、バブの経営を手伝うことになり、子どもたちの食事もようやく保証される。

このような親のもとでは、ファーストフード店の食べ残しをかつさうやり方から、口のうまい男は信用できないという世間知に至るまで、子どもたちは親よりずっとしっかりと生きる力を身につけている。子どもたちの家には食卓すらもありはしない。しかし、『タトゥー・ママ』も『ローラ・ローズ』も、血のつながった女同士の絆を強調するという意味において、また養育に対する父親側のかかわりの希薄さという意味において、まったくテイストの

違った『ディア・ノーバディ』と非常によく似ているとさえいえる。

4. 摂食障害

シングルマザーに加えて、離婚家庭、再婚家庭というのもウィルソンの作品ではしばしば用いられる設定である。彼女の作品中ではめずらしくシリーズものの<ガールズ>シリーズ^{*7}には、三人の仲のよい女の子が登場する。語り手で主人公のエリーは早くに母を亡くし、父とその再婚相手と、母親の違う弟との四大家族である。エリーは継母をママとは呼ばず、アンナと呼んでいるが、家族の仲は悪くはない。アンナは一生けんめいよい母親になろうと努力しているし、エリーもそれに応えているからだ。エリーがちょっと太めの自分の身体を意識し始め、ダイエットを始めると、アンナはエリーの女心を理解しようと務め、一生けんめい「健康的」にダイエットができるよう低カロリー食を作って協力してくれようとする。しかし、いったんダイエットを始めたエリーはとどまることをしらず拒食症への道をまっすぐ突き進んでいくことになる。

現実には、十代の女の子に関わる問題として、摂食障害がそうとう大きなウェイトをしめていることは間違いない。ティーンズのファッションと食行動、そしてそれに絡む家族との葛藤を描くことが多いウィルソンが、この問題を回避するのは不可能であったろう^{*8}。最初に言及した三作品でも、摂食障害とまでは行かなくても、満たされない心を食べることで補填しようとする少女たちが登場していた。だが、ダイエットと拒食症を正面きって取り上げた『ガールズ・アンダー・プレッシャー』(*Girls under Pressure*, 1998)では、あくまで深刻になることは避け、作品をエンターテインメントに徹しながらも、意外に教育的配慮が行き届いている。

摂食障害の原因は、ただスマートになりたいという美容的理由だけではなく、非常に複雑なものが絡み合っており、その中には家族との葛藤が大きく関わっていることは周知の事実である。そして、エリーの両親もそのくらいの常識はわきまえている。

“It’s all my fault,” says Anna.

“What?”

“I was the one who suggested a diet in the first place. It was crazy of me. And then it’s been hard for Ellie,

losing her mother and having to get used to a step-mother. I think it’s partly symbolic. Ellie and I have got closer recently and this is worrying for her. She must feel she’s being disloyal to her mother’s memory. So she rejects my food. It’s a way of rejecting all my nurturing and care.”³⁾

こうしてアンナが自分を責めると、父親のほうも十代の摂食障害についての本を買ってきて読み始める。

“It’s worrying me, Ellie. You really do have all the classic signs of anorexic personality. You’re clever, you’re a perfectionist, you’re very determined, you can lie like crazy, you’ve had a traumatic childhood ... you know, losing your mother so young.”⁴⁾

しかしながら、ウィルソンは、こうした「大衆的」心理学で武装して、エリーを理解しようとする両親をからかってでもいるようだ。両親が自分たちのあり方を反省し、深刻になればなるほど、エリーはそんなところに原因などない、と意固地にダイエットに執着する。友達の警告も、先生の忠告も彼女の心には届かない。

結局のところ、エリーが正気に返り、自分の食行動の異常さとやせ方に気がつくきっかけとなるのは、もう入院せざるを得ないほど重症の拒食症に陥った級友ゾーイの姿だった。そういう意味でゾーイはエリーのネガティブな分身である。ゾーイを見ることでエリーは自らの姿を鏡に映して見たのだ。ウィルソンはあくまで一人称の主人公の気持ちによりそう視点を取り続ける。だから、エリーは自分で気づかねばならないである。ゾーイという分身を作り出すことで、『ガールズ・アンダー・プレッシャー』は、たとえば拒食症を扱ったスティーブン・レベンクロンの『鏡の中の少女』(1978)のように深刻にはならず、しかし読者にもバランスの取れた認識を促して、「教育的」に解決を見る。

5. 理想の家庭の明暗

エリーの両親は、娘のダイエット事件によって、再婚家庭であることを強く意識させられ、エリーから見れば見当はずれであるにしろ、なんとか埋め合わせをしようと努力している。ウィルソンの作品の

中では、これはむしろ珍しい例にあたる。なぜなら、今までにも見てきたように、親が自分たちの欲望に忠実で、その結果、振り回されるのは子どもたち、というのが彼女の作品の典型だからである。離婚した両親が子どもの親権を争い、子どもにその選択をさせるとしたら、彼女はどちらを選ぶのだろうか？父と、子連れの再婚相手との家庭か、母と、こちらもまた、子連れの再婚相手との家庭か。自分自身の両親がそろって暮らす昔の家庭こそが、アンディにとって一番の理想なのだが、それがもう無理だとしたらどうなのだろう。『バイバイわたしのうち』(*The Suitcase Kid*, 1992) は、そんなジレンマに立たされたアンディが、失われた家族を惜しみながらもなんとか現実と妥協していこうとする物語である。

エリザベス・ティールは、ウィルソンを「もっぱら核家族の規範からはずれた家庭を描く」⁵⁾ 作家であるとした上で、彼女の作品には、理想の家族像が、失われたものという姿で強調されていると指摘している。その意味では、ウィルソンもまた、ティールが言う「遅れてきたヴィクトリア朝人」である現代人なのである。

アンディが、父の家と母の家を一週間ごとに行ったり来たりしながらも、常に持ち運んでいるのが、日本でも有名なシルバニアン・ファミリーのウサギ人形ラディッシュだというのは示唆的である。なぜなら、シルバニアン・ファミリーというのは、ティールの著作の中で、ヴィクトリア朝的な家に暮らす理想の家族を模したおもちゃの典型⁶⁾ として挙げられているものだからだ。

アンディが本当に望んでいるのは、マルベリーの木のある家でパパとママと自分が一緒に暮らしていた頃の暮らしであり、失われた理想の家族像は、その頃ママが焼いてくれた自家製のマルベリー・パイに象徴されている。庭にある木の実を使ったホームメイドの丸いお菓子は、完璧さと家庭性と幸せを表しているのである。

父の再婚相手のキャリーは、ベジタリアンで、インスタント食品には嫌悪感を表明する。

‘Oh, that’s jelly out of a packet,’ said Carrie, looking shocked. ‘I’d never give you junk food, Andy. You need natural fresh food with lots of nourishment.’⁷⁾

しかし、キャリーが作ってくれたオレンジゼリーを、アンディは “a weird sickly brown. It wasn’t jelly either. It didn’t stick”⁸⁾ と表現する。ウィルソンの作品には手作り与健康食と自然食品に入れ込んでいるおとなが時々登場する。しかし、いくら健康的な手作り食品であろうとも、それが親の主義の押しつけである以上は、子どもたちから見れば、ケーキとピザしか与えない親と変わりはないし、むしろ「普通でない」という点ではより救いがたいのかもしれない。

見たところ、非の打ち所のない理想的な家庭の、いかにも完璧な主婦である母親が食事で事実上、わが子を虐待していることが明らかになるのは、『ダイヤモンド・ガールズ』(*The Diamond Girls*, 2004) である。主人公のディクシーは引っ越し先の公団住宅の近くで、隣家の高級住宅に住む少女メアリーと友達になる。ディクシーの母親スーは、全て父親の違う4人の娘を連れながら、なおほれっぽく、男たちに依存して、図太く生きるしたたかな女であるが、メアリーの母親はそれとは対照的に、伝統的で家庭的な専業主婦である。

She looked like a mum in a telly advert, the sort who’d make a meal on her cooker and then serve it up on a tablecloth.⁹⁾

ディクシーの目から見たメアリーの母親が、食事の用意をする女性として描かれているのは興味深い。

ところが、メアリーが奇妙なほど爪を短く切られていることに気づいたディクシーは、メアリーの家族に隠されたなにかに気がついていく。それはお茶の時間にディクシーが訪ねていき、メアリーの父親に誘われてお茶をお相伴したとき、明らかとなる。母親のほうはあきらかにディクシーの存在を疎ましく思っているが、おくびにも出さない。メアリーはパンの耳を食べたがらないといって怒られているところだったが、ディクシーはその耳が非常に固くてまずいことに驚く。ディクシーが目撃したのは次のような光景だった。

Mary and her mum were still at the table. Mary’s mum was pinching Mary’s nose so that her mouth fell open. She rammed the crusts right down her throat, so hard that Mary’s head jerked backwards.

I gasped in terror. Mary's mum straightened up. She smiled at me. "There!" she said. Mary's eaten up all her crusts like a good girl.¹⁰⁾

驚いたことに、メアリーの父親は妻の娘への虐待にはまったく気がついていない。

たしかにディクシーの母親は、常識はずれのシングルマザーであるが、完璧に理想の母親を演じるメアリーの母もどこか狂っている。絵に描いたような核家族の理想形をしていても、家族の心理のゆがみは、こうして食卓に反映されているのである。

『バイバイわたしのうち』では、アンディが偶然であったマルベリーの木のあるうちのピーターズ老夫妻が、心の居場所を見つけられなかったアンディの支えとなり、ピーターズ夫人の自慢の手作りのシード・ケーキが出てくるお茶の時間が彼女を救う。そしてアンディは、父、母、ピーターズ夫妻の3つの家をかかわるがわる行き来しながら生きるという生活を、自ら選び取る。選べなくて行き来しているのではない、3つの家族を得たのだと、そしてそのやり方でうまくやっているのだと、納得する。ここでもまた、救いの手は手作りのケーキを差し出す女性だった。

『ダイヤモンド・ガールズ』では、上記のように、手作りの食事を整える理想の家族の暗部も描かれるが、ディクシーの家族は常軌を逸したまま、母、娘たち、そしてその娘も加えて、シングルマザーと女の子が作る「ダイヤモンド・ガールズ」が力強く絆を結ぶ。スーに食い物にされ、利用されたブルースという気の弱い男は、成り行きからダイヤモンド・ガールズに食料を調達する役割を果たすが、ウィルソンの作品中、男性が料理をする例はまったくない。＜ガールズ＞シリーズで、エリーの弟エッグの趣味が料理であるというのが、唯一の例外である。父親はみな違って、母と娘たちは世界一、というこの結末にも、血のつながった女系の共同体が称揚されているようだ。

6. おわりに

ジャックリー・ウィルソンの作品を彩る＜食＞は、ファーストフードからクリスマスのごちそうまで、イギリス独特のものが多く、確かに十代の登場人物は、フィッシュ&チップスよりはマクドナルドを好み、スコーンのクリームティーよりは、チェー

ン店のドーナツやアイスクリームに惹きつけられている。しかし、核になる理想の食卓は、(たぶんそれは幻のものにすぎないのだが、) ローストビーフとヨークシャープディングのディナー、きゅうりのサンドイッチとシード・ケーキのお茶なのだ。

ウィルソンの作品の主人公たちは、自分の置かれた困難な状況を脱出しようと努力を試み、できる限り、現実と妥協しつつ、アンディのように「うまくやっていく」ことを学ぶ。それに比べると、あきれほど進歩も成長もないのか彼らの問題を引き起こした親たちである。だが、バーバラおばさんやピーターズ夫人、トレーシーの祖母のような、女性の料理力はしばしば主人公の努力を支え、不安定な家族をまとめなおす手助けをしてくれる。男性の影が非常に薄いという点が、彼女の作品の特徴であり、また現代性ということを考えてみると、欠落しているところだといえるだろう。料理する男性が主人公を支えるという展開があってもよさそうなものだ。

ともあれ、首尾一貫して子ども主人公の目から描かれたストーリーは、表向きに「食育」などというお題目とは無関係であるように見える。ディクシーはチップスしか食べないし、ドルーはタトゥー・ママの気まぐれなお菓子尽くしが決して嫌ではない。インディアが過食に走るのも、エリーがダイエットに励むのも、よくある日常の風景の一コマである。しかし、ウィルソンの描く家族の向こうには、理想の核家族の姿が透けて見える。もはやケストナーの『ふたりのロッテ』(1949)のように、子どもたちが離婚した両親を和解させるような時代ではなくなった現状であるからこそ、かえって幻の理想は、ウィルソンの作品の中で逆照射されて浮かび上がるのである。

注記

本稿は2010年日本児童文学学会7月例会(於日本女子大学)での口頭発表をもとに編集・執筆したものである。

註

- * 1 ジャックリー・ウィルソン公式ホームページ <http://www.jacquelinewilson.co.uk/>より。
- * 2 Nicholas Tucker, "Chapter 2. Jacqueline Wilson" in Nichokas Tucker and Nikki Gamble ed.

Family Fictions. London; Continuum (2001)

- * 3 児童文学における<食>表象の重要性については、川端有子・西村醇子編著：子どもの本と<食>—物語の新しい食べ方，玉川大学出版局，東京（2007），Kara K. Keeling and Scott T. Pollard ed. *Critical Approaches to Food in Children's Literature*, New York: Routledge (2009) を参照のこと。
- * 4 英語の習得を目的にイギリス人の家庭に住み込んで子どもの世話などをする外国人（主にヨーロッパ人）のこと。
- * 5 イギリスでは，生活保護を受けている家庭などに公営住宅は安い家賃で提供されている。
- * 6 インディアの愛読書は『アンネの日記』である。
- * 7 現在のところ，『ガールズ・イン・ラブ』（*Girls in Love*, 1997）『ガールズ・アンダー・プレッシャー』（*Girls under Pressure*, 1998）『ガールズ・アウト・レイト』（*Girls out Late*, 1999）『ガールズ・イン・ティアズ』（*Girls in Tears*, 2002）の四作が出ている。
- * 8 事実，『ガールズ・アンダー・プレッシャー』のニューヨーク版のペーパーバックの裏見返しには，” If you or any of your friends are struggling with an eating disorder as Ellie does in *Girls under Pressure*, you can get help from…” としてナショナル・摂食障害協会のHPサイトが紹介されている。

引用文献

- 1) Wilson, J.: *Secrets*, Corgi Yealing, London, 180 (2007)
- 2) Wilson, J.: *Secrets*, Corgi Yealing, London, 80-81 (2007)
- 3) Wilson, J.: *Girls under Pressure*, Dell, New York, 164 (2002)
- 4) Wilson, J.: *Girls under Pressure*, Dell, New York, 182 (2002)
- 5) Thiel, E.: *Fantasy of Family: Nineteenth Century Children's Literature and the Myth of the Domestic Ideal*, Routledge, New York, 161 (2008)
- 6) Thiel, E.: *Fantasy of Family: Nineteenth Century Children's Literature and the Myth of the Domestic Ideal*, Routledge, New York, 159 (2008)
- 7) Wilson, J.: *The Suitcase Kid*, Corgi Yearling, London, 64 (2006)
- 8) Wilson, J.: *The Suitcase Kid*, Corgi Yearling, London, 64 (2006)
- 9) Wilson, J.: *The Diamond Girls*, Corgi Yearling, London, 89 (2007)
- 10) Wilson, J.: *The Diamond Girls*, Corgi Yearling, London, 155 (2007)